

〔平成 30 年度「小中一貫教育支援事業」カリキュラム作成全道研修会〕

小中一貫教育の核はカリキュラム・マネジメントと授業改善！！

本事業の指定地域、指定校等から約 140 名が参加し、「平成 30 年度『小中一貫教育支援事業』カリキュラム作成全道研修会」を 5 月 23 日（水）に開催しました。

実践発表 「9年間を通じたカリキュラムの作成について」

江差町、北広島市、斜里町から 9 年間を通じたカリキュラムの作成について発表いただきました。

〔江差町〕算数・数学科

- ・視覚的に捉えやすいようまとめた算数・数学カリキュラム（領域別具体編）を活用し授業改善を推進



江差町立江差北中学校 小菅主幹教諭
江差町立江差北小学校 白山教諭

〔北広島市〕外国語活動・外国語

- ・目標や活動例を示した外国語の指導計画や目指す姿を位置付けた CAN-DO リスト等を作成



北広島市立東部中学校 加藤教諭

〔斜里町〕生活科・総合的な学習の時間

- ・生活・総合的な学習の時間の目指すべき方向性を整理し、計画一覧表、単元の指導計画を作成



斜里町立知床ウトロ学校 米澤教頭

講演 「小中一貫したカリキュラムの編成・実施について」

講師 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 小林 宏己 氏

【カリキュラム・マネジメント】

- カリキュラムは、作成・実施・評価・改善までを含めて考えることが大切
- 小中一貫教育が「多忙感」につながらないように、取組の重点化を図ることが重要
- 見通しをもち、息長く取り組むためには幼保関係者、保護者、地域住民への方針説明と協力要請が大切

【授業改善】

- 小中一貫教育は授業の質を高める手段であり、小中の授業改善を図ることが大切
- 小中で板書やノート指導、振り返りの時間の確保等の共有化を図るなど、中学校区内で「学び方」を形成することも大切
- 教師間の「相互不可侵条約」を撤廃し、相互理解を深めることが大切



協議 「今後の小中一貫したカリキュラムの編成・実施について」

協議Ⅰ 「目指す子ども像の実現に向かう 9 年間を通じた指導計画をどのように作成するか」

- ・校種・課題別のグループで、指導計画を作成する上での工夫や、乗り入れ指導・教科担任制の活用方法、組織体制の整備等について意見交換

協議Ⅱ 「中学校区における課題を踏まえ、今後、何にどのように取り組むのか」

- ・中学校区ごとのグループで、協議Ⅰの情報を共有し、指導計画の作成に向けた今後の取組について協議

まとめ 講師 早稲田大学教育・総合科学学術院教授 小林 宏己 氏

協議の様子をうかがうと、北海道では次のことを視点として取り組むことが大切

- 小学校は幼稚園・保育所から、中学校は小学校からというように、前の段階から子どもの学びの姿を知ること
- 組織の多様性、柔軟性を大切にし、部会などの組織体制をフレキシブルに見直していくこと
- 中学校の取組を小学校に導入し、学習過程や指導方法を統一すること
- 小中の教員によるグループで研究協議を実施すること

参加者の声

カリキュラム作成全道研修会の参加者から次のような意見や感想をいただきました。

(※アンケートより抜粋)

【実践発表】について

- 実践発表が分かりやすく、小中一貫教育推進の工夫や必要なことを知ることができました。
- 当町で目指している義務教育学校の設置に向け、4-3-2ブロックで「目指す子ども像」を設定している実践が大変参考になりました。
- 各発表校の実践はそれぞれの特色があり、すぐに活用できるものだと思います。



【講演】について

- 小中一貫教育は「授業改善」であるという講師の言葉が印象的でした。小中の先生方が義務教育9年間の子どもの育成、15歳の姿に責任をもつという意識をもち続けるための議論を、中学校区で仕組まなければいけないと思います。
- 一貫教育は「こうすべきだ」のような内容ではなく、提案型・紹介型の内容であり、具体例が多く分かりやすかったので、やる気が出てきました。
- ①教師間の相互理解 ②授業の質が変わる ③「多忙感」防止について大変勉強になりました。早速、本校でも生かしていきたいと思います。
- 「相互不可侵条約の撤廃」は、小中一貫教育を進める上で非常に重要な問題です。この取組がなぜ必要なのか、しっかり町内の学校に伝えたいという思いを強くしました。
- 「授業はスタートでありゴールである」という言葉が印象的でした。カリキュラムを全体で交流できるように「相互不可侵条約の撤廃」を呼びかけていきたいと思います。

【協議】について

- それぞれの地域や学校との共通点や苦労を共有することができました。各校の取組の様子を知ることができてよかったのですが、もう少し時間があれば嬉しかったです。
- コミュニティ・スクールを上手く活用して、地域を巻き込んで小中一貫教育を進めていきたいと思いました。
- 学校や地域の実態によって大きな温度差があることが分かりました。特に中学校区の校長同士の協議では加配配置や市町村教委の熱量の大小によって差があることが分かりました。中学校からの支援が圧倒的に多く、部活動の問題もあり、負担感が大きいのが実情です。それをどうクリアしていくか、小学校から中学校への支援をどのようにすればよいのか、課題は多々ありますが、方向性が定まったのが成果です。



【研修会全体】について

- 小中一貫教育が目的ではなく、子どもたち、教員、地域や保護者にとっての手段であることが改めて実感できました。
- 各地区で作成されたカリキュラム等が、全道で共有できればいいと思いました。作成された学校や市町村にお返しができないのは心苦しいですが、よいものは共有財産化できればと思います。
- 講演を聞いたり、他の市町村の先生方と話す中で、「本当に必要な取組か?」「この取組は本当に意味があるか?」を考えて取り組んでいかなくは多忙化に拍車がかかるだけだと感じました。「小中一貫教育をやらなきゃならないからやる」というだけの取組は、やめなくてはいけないと感じました。
- 課題も見えましたが、それ以上に今後の取組への見通しがもてました。小中一貫教育の成果が、子どもの姿を通して見えてくるようにしたいです。
- スタート時(今頃の時期)と終了時(秋から冬)の2回あってもよい研修だと思います。